

部 118 2146^P 稿 1722^P 書 2352^P
 (旁) 1226^P

第二十五章

帰国を延ばしての

倭国での日々

て、ゆん
梯の倭国での大任は無事に果たした

そ
こ
で
建中校尉梯儁の多大の功勞に報い

盛大極まりない酒宴が催された。その日（八月十二日）の夕刻から

もてなす大郷食宴が設けられ、時はまるで夢の
 1075
 19
 1075
 19

よ
う
に
打
ち
過
ぎ
て
い
つ
た

倭国の貴人達は、宴楽の趣向をこらし、

有^{ゆた}る^るも^ま舞^ふ臺^{たい}
 舞^ふ臺^{たい}優^{ゆう}雅^や
 酌^{しやく}み^み交^{かう}わ^わて^て
 大^{おほ}い^いに^に歡^{かん}待^{たい}
 附^つる^る長^{ちやう}夜^やに^に

魏国の天子の代理として、金印紫綬、なら

ひに詔書を携えて来倭した遠来の貴賓梯僦は
いまや、一大英雄的的存在~~だ~~になった。

あのおびただしい豪華な品々を眼の当りに
 した倭人たちの興奮が、梯焦を午にも置かな

③3952^P (こと) 1,682^P 辞了かてな... 万三-173^P 紀下192^P 主客元1058^P
 改更4行 74^P 載せない 8月12日紀下190^P 未4行
 8月16日紀下192^P 5行

のト... 延^{てい}での¹⁰⁷⁵饗^{きやう}応^{おう}は、八月十二日から、八月十六日
 ま^{まで}続^{つづ}いてい^{った}た^{ので}はな^からう^か。(推
 古^こ紀^き十六^{じふ}年^{ねん}八月^{はつ}十六^{じふ}日^{にち}条^{じョウ}参^{さん}照^{しョウ})
 ※も^もつ^つと^とも^も、推^{すい}古^こ天^{てん}皇^{わう}の¹¹⁶⁸十六^{じふ}年^{ねん}八月^{はつ}の¹⁷⁵⁶場^ば合^{あひ}は
 聖^{せい}徳^{とく}太^{たい}子^しと^と、隋^{ずい}煬^{やう}帝^{てい}が¹¹⁶⁸遣^{せん}わ^{した}た^{使者}裴^{はい}世^{せい}清^{せい}と
 の^{あい}間^{かん}に^いさ^さか^いい^があ^つた^{ので}、そ^そこ^こで^で、先^{せん}例^{れい}(梯^{てい}
 僞^いの^例の^{さいご}最^{さい}後^ごの^日で^{ある}八^{はつ}月^{げつ}十^{じふ}六^{ろく}日^{にち}の^みを
 踏^ふ襲^{しゆ}した^{のか}も^も知^しれ^{ない}い^うま^{まで}も^なく
 全^{ぜん}く^く定^{てい}か^{なら}ない^{こと}で^{ある}。
 ※な^なお、聖^{せい}徳^{とく}太^{たい}子^しが、隋^{ずい}か^らの^{使者}裴^{はい}世^{せい}清^{せい}を
 賞^{しょう}で^なか^つた^{経緯}に^つり^ては、第^{だい}七^{しち}十^{じふ}四^し章^{しょう}
 へ^倭王^{わう}と^なす^を更^たむ^の項^{こう}に^おい^て述^{しゆ}べ^た
 い。

*

ほんりやう 2060^P
奔流 激しい勢いの
流れ。

浪速 1656^P

かざ 飾り船 紀小 303^P

1,683^P

隋書倭 73^P 11^P 魚島の遠さ 紀大 (上) 325^P
紀上 198^P 注 12 難 飼 井光 磐排 別子
1482^P 1483^P 2次 2行

風流島 ^{たはれいしま}

その後、梯僦がどのようなに過したのか詳らかに
なりか、以下、筆にまかせて書き綴つてみることにしよう。

梯僦は、タクマガ原の都から任吉の館へ帰
途中、緑川南岸の吉野に立ち寄つて、
井光へ吉野首部や磐排別子（吉野の國棟部）
の村を訪れ、その独特の風習を見聞したり、

「神武紀」。「隋書倭国伝」参照）
「そ」てさらに数日ののち、小船の内の人と
なつた梯僦らは、緑川の流に浮かび、有明海東岸に
形成された大きな日入江（宇土島東北隅
と龍田山南麓と熊ノ岳南麓を結ぶ入江）
近畿の浪速の入江に相当）の方へと漕ぎ下つ
ていった。

小船は速度を早め、緑川の豊かな奔流に押

1.684^P 小林 275^P 柳 345^P 877^P 2060^P 275^P 877^P 1280^P 白川の河口
 奔流 275^P 柳 345^P 877^P 2060^P 275^P 877^P 1280^P の流すは 軍がた

一 流され 遠浅の入江の只中も猛烈な勢いで
 進んで行った。水飛沫が飛び散る。大潮
 九月朔日の一日二日後に起る朔望潮の引き
 潮に乗った小船は、幾艘も連うなりで、
 で射られた矢のように激しく流れ下ってゆく
 のだった。玄辞苑へ大潮へ朔望潮へ参照
 の引き潮と、舸子たちの櫂さはきによって、
 小船の群れは瞬く間に有明海の海
 上はるか遠くへと漂い去っていった。

*

1583^P

1374^P

2184^P

97^P

おだ 305P
船乗 1955P
旋律 1278P
おだ 305P
船乗 1955P
旋律 1278P

かこ 396P
水夫 船頭 船乗 1955P
旋律 1278P

1.685P-1/3

893

有明の海は、穏やかで波さえなく、雲仙岳の
秀麗な景観を鮮やかに映していた。
キララカに輝く鏡のような海面に、軽やか
浮かんだ船列は、乗人達が奏する船乗の心地
よい旋律に乗って滑るように進んでいく。
東南の方角東南がなたに小さく見えていた
住吉の小島が、だんだんはつきり見えるようになってきた。
そんな時、梯儼の目がある一点に釘付け
になった。

「奴佳親殿。水夫達に言って、この船一艇
だけを、そつとあの裸島（岩礁の島）に着け
てくれないかしら」
梯儼が指差す方を目で追っていった奴佳親
は、――すぐに客人の意図するところを
察した。
「止まれ。みんな、これより先へ行つては
ならぬ」
奴佳親は他の船全てを押し止めたのち、船
長に「

客人をお乗せしているこの一艇をゆる

風流人 1687 99
能本の地名は 87
伊勢物語 144
地名行実 974
玉姫 1688

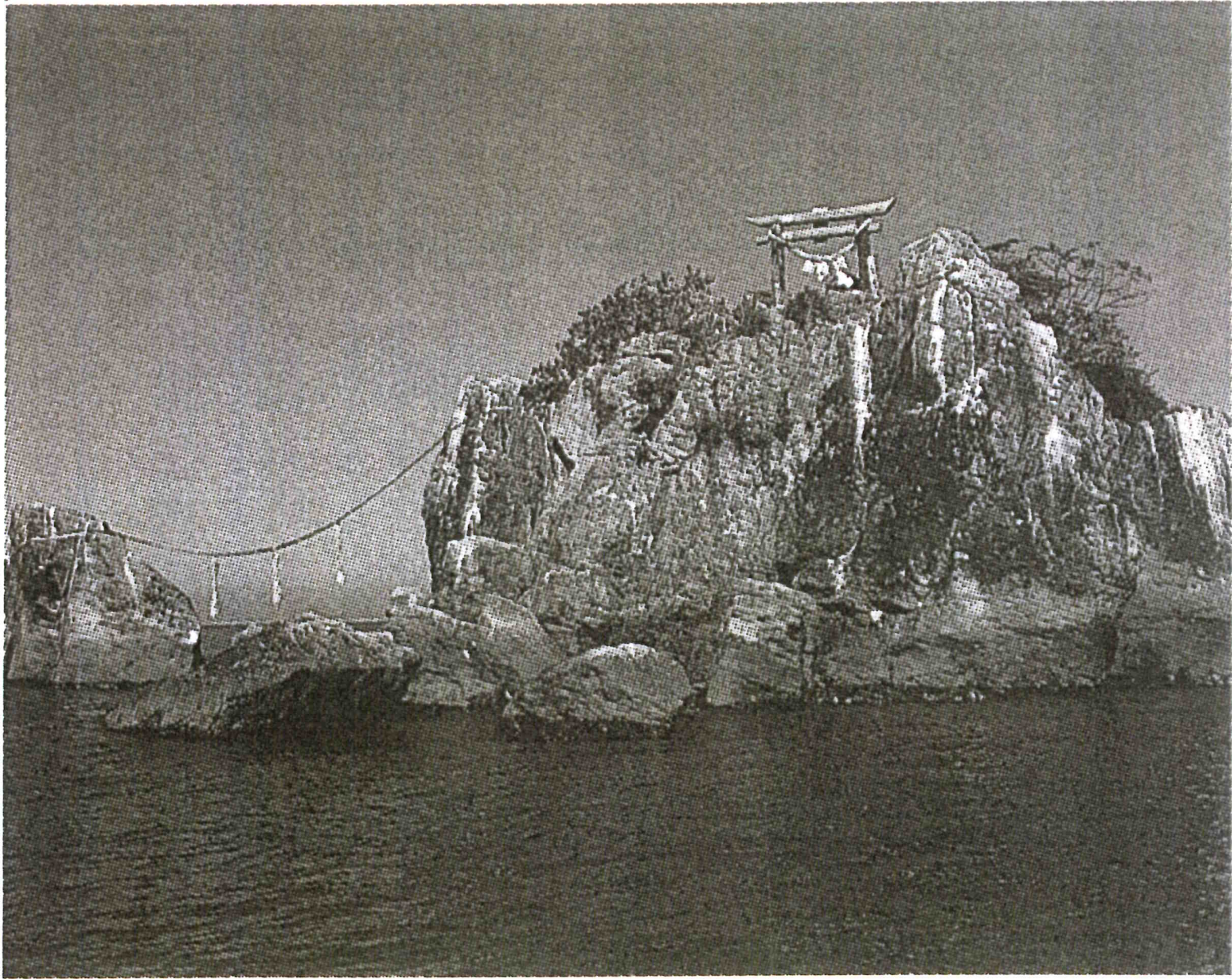
浦上立つ波
1.685-2/3
主 嬉々 516
飾 船 地名 974
紀小 303

地名 974 岩礁とある
(元 494 かみ岩)

ゆると「静かに」著ぎ進めていって、あの裸島
に近づけよ
と命じた。
その島は、住吉の島の沖に屹立する小さな
岩礁であって、取りたてて変わったところもな
く、
「きたれる波をこらもとするだけの、ただ
の裸の島」
第4回 幸島基部北岸の図
にすぎなかった。「帝国地名辞典」太田爲
三郎、名著出版へ「風流島」参照
「とは」いえ「今」
その裸の島は、嬉々とし
て浦波に遊び戯れ、愛しく浦波に遊び戯れ
ていふかのようであった。
へ何という美しいさなのだろう
その裸島の岩の上には、麗しい玉のよう
な姫君が、ひらひらと領布をなびかせて立っ
ており、
風流人梯儼の引きつけずに
かなかった
目と心とを
くれ。お驚かせしないように、そうと静かに著いでお
寄せ

1,685^P-3/3

左頁の上半分に
はみ出して
大きく掲載
下さい。



1329 1429 写真図版 255 風流島 (たはれ島^{はたかいま}、裸島とも呼ばれている)

『新宇土市史』第一巻、宇土市、平成15年3月31日発行、137頁参照。

1229 遠景は、写真図版171に掲載。

←④ 731^P-2/3

362^P

(市)1582^P-2/4 佐賀県地図

いほん 侍 968P
御簾 2111P 1.686P

ニと
左19行 ← 「やがて」

てい ね 孤島 1511P
ニしよ 大27528P
孤島 1511P

てくれなにかし

・ 梯傷は、ただもう、うっとり見つめなが

ら言った、孤島上の姫

一、方、は、たいそうな船の中から一艇

だけが抜け出し、近づいて来るものだから、

「一体、何事なのかしら」

と興味深げに打ちながめていたか、

やがて、その船の上の人が魏国からの客人で

あり、しかもその視線が、己の方に向け

られてゐることを悟ったとき、

「まあ、——人なところに居たらいいな

いぬ」

と、領布をひるがえし、急いで岩場を降り

ていった。そして侍女達に抱きかかえられる

ようにして、飾り船の御簾の内へと身を隠し

た。

船を出すわけにもゆかず、ただ、と息をひ

そめてゐると、次第に櫂の音が近づいてきて

——「——やがて止んだ」

■ 梯傷の乗る船は、姫の飾り船のすぐそばに

紀小 303

伊勢物語(南)144P
 枕草子(F)204P
 1129P
 560.4.3
 元1875P
 1687P
 言文 言得1405P
 好者(言得1185P)
 目の上の2274
 枕草子(工)342P
 1678P=1/255
 御簾 211P

あつた。
 小船の内からその身を乗り出すようにして
 梯子は言った。
 船遊びなどしていらっしゃるうち、遙かに貴女
 の目もあやな美しいさを目にし、誘われるよう
 に、こころへやって参りました。
 梯子の言葉に、すだめの内なる人はこう言った。
 「こ小はこ小は魏の御方。魏人へ戯人」な
 れはさぞかし戯へたわぶれを好む好者(風
 流な人)であり、女の心をもてあそぶ仇敵
 なのではないようぬ。
 「私のことを戯人(うわき者)だとおっしゃる
 のですか。名前からすればたしかに戯人だと
 言えましょうが、しかしそれはあまりにも
 酷い褌衣といふもので、ほらごらん下さい。
 この裸島という名を負うこの島も、名前の通
 りだと裸でありましょうが、しかし寄り来
 白波の濡れた衣を纏っているではありませんか。
 物語六十一段。枕草子(角川文庫、二六
 二、二〇四頁至一一七。熊本の地名(土

地名辞 224^P 457^P ①1696^P

1,688^P

訓む 大正 2045^P 比目道 1903^P
西都大軍村 凡士 418^P 玉姫 1784^P
184^P 玉姫姫 凡士 1784^P (橋姫) ①1696^P
(1398^P 玉姫)

井上辰雄、熊本日日新聞社、ハ七頁参照)
こーうして二人はすっかり打ち解け、むつ
まどく語り合う仲間となった。
女は、曰(有智の愛姫)とも、曰(宇治の橋姫)
とも、曰(玉姫)とも呼ばれてゐた。
城国風土記逸文へ宇治橋姫✓条。『広辞苑』
な、蛇足ながらあえて述べる、
と書いて、「ひらめ」と訓む。
●はつきりしないもので
へ、有智の愛姫とも、「ひらめ」になぞら
え、鯛赤女と共に後々の世にまでも語り
伝えられてゐたのであうう✓
と想像される。
*

②筑前国筑紫郡に在る壺坂山(宝満山、
筑前国筑紫郡大宰府町大字内山は、古には
有智山に作る。

おひつらなりから伊勢物語の
在原平 188°神座

1.689P-1/2

太宰府神社=天満宮
福岡市の7次62° 4803°
4540° 西御太府社184°
2009° 1980° 内山 4764°

御笠山ともいうには、日宇智山寺（竈明
山寺）と呼ぶ供僧寺がある、
という。（「帝国地名辞典」太田為三郎、名
著出版へ内山へ竈明山へ参照）
この物語では、
へもともと一有智の愛姫は、筑前国
の有智山に居住してゐた姫なのであらう。
と仮定してみよう。
また、太宰府神社（太宰府天満宮）あたり
から観世音寺の南を経て、水城村へと西流す
る御笠川の上流域を日染川といい、別名、
逢初川・思初川・思川などともいう。（「帝
国地名辞典」太田為三郎、名著出版、八九〇
頁。「伊勢物語」日本古典文学大系、岩波書
店、一四四頁、注十一参照）
あるいは、在原業平は、有智の日染川と
有明海の日裸島（別名日風流島ともいう）
との間に深い関連性があることを知つていて、
次の歌物語を創つたのかも知れない。
伊勢物語、六十一段

昔、男、筑紫まで行きたりけるに、

「これは、色好むという好き者」

「この男の人は好色者よ」
と、簾の内なる人の言ひけるを聞きて、

染河を渡らむ人のいかでかは

色になつてふことのなからん

「染河をわたる人はどうして色好みになら

ないことかあろうか。必ず、色好みになるだ

ろう」

女、返し、

名に「おはばあだにぞあるべき風流島」

浪の濡衣きるといふなり

風流島という名前を持ってゐる島は、名

の通りだと浮気をするはずなのに、浪をかぶ

って衣が濡れるへ無実の罪を負う」という話

です。それと同様、染河も無実なのであつて

あなたは染河を渡る前から、もともと好色な

のよ

■また、口後撰和歌集ら巻十五一一二〇に

は、次のように記されてゐる。

女のあだなりといひければ

朝綱朝臣

まめなれどあだ名は立ちぬたはれ島

膨らむ 1931P

枕草子(F) 204P
地名辞 974P

枕草子 204P
1690P

枕草子(F) 84P

枕草子 1547P
伝承 伝説 枕草子 204P

後援和 237P
枕草子 204P

寄る白浪を濡れ衣に着て
実直なのだが浮気者だ、という評判が立って
しまった。風流島が寄せる白波の濡衣を着るよ
うに、私も自分の知らないことを濡衣として着て
うーて、肥後守、清原元輔の娘である清少
納言も、肥後国の風流島についての伝承をよく知って
いたのだあろう。
「島は八十島。浮島。たはれ島。絵島。
松が浦島。豊浦の島。離の島」
と書きしるしてゐる。(枕草子、一九三段。枕
草子(F) 石田穰二訳注、角川文庫、二〇四頁、注二七参照)
なにはともあれ、風流島(裸島)の名は、
夫木集・松葉集・和歌初学抄・八雲御抄など
にも見えており、平安時代の人々によく知ら
れてゐたようである。(「帝国地名辞典」太田
為三郎、名著出版、〈風流島〉参照)
有智の愛姫との機知に富んだ会話は、新鮮
で、心なごませるものであった。梯嶋の胸の
内に、姫(比目)を想う気持がいや増しに膨

膨 1931

1.691^P-1/2

こと 懐 1660^P

らんでいった。

■とはいうものの、倭国での任務の全てを果した梯儼は、帶方郡へ帰らなければならなかつた。

「何とも実に楽しい日々だ。」

■夢のようにうち過ぎた倭国でのさまざまな

ことどもを思い返して、懐く、去り難く思

いながらも、――梯儼は、帰り仕度に取り

かかった。

■もっとも、彌馬升達は、梯儼が荷物を整理

しはじめたのを見て、――いぶかしく思っ

た。

「梯儼様、何をしておいでなのですか。お

やおや、こんなに散らかしておしまいにな

ってし

「いや、もうそろそろ帶方へ帰らなければ

なるまいと思うてな。荷をまとめているとこ

ろなのだよし

「帶方へですって。帶方郡へ、もうお還り

になるのですかし

帰 20

⑤ 1594-2/2

→ 43.11.29(金) ⑤
あわ 懐 73 P
元 79 P

1.691-2/2
代理 ⑤
元 213 P
元 304 P
元 1372 P
元 531 P
元 1580 P
元 1404 P

まろうとのつかさぜつきやかり
■掌客(接客係)である彌馬升たちは皆、目
を丸くして驚いた。そして、全く信じられな
い、といった面持ちで、
た。

「それはなりません、梯隼様。梯隼様は、
倭国にいらっしゃったばかりではありませ
んか。もつと、ごゆっくりして
いたさきとう存します」
「そうですとも。梯隼様は、万里の波濤を
越えて絶海の真只中のこの国へお越しになっ

たのですから、もう少しは御留り下さつても
いいと思います。そんなに
りになることはないではございませぬかし

「考えてみますに、梯隼様は、恐れ多くも
魏国の天子の御名代として、倭国との絆を深

め、同盟を確固としたものとする為には、
ならびに印綬を携えて来朝されたのです。
「ばかり倭国での御滞在が長びいたとしても
誰も、決して咎め立てないいたしますまい」

倭国との絆を深め、同盟を確固としたものとする為には、

魏志倭人傳 正始元年

559.5.25
410.6.5

559.5.25
410.6.5
1.692^P

い 習わす 習慣的に言う
「考えて」 (22)

小村 302^P
礼儀 礼記

て いる 礼記に、
礼尚往来
とあります。
周代の礼制を踏襲して いる 私達倭人は、
互いに往来して 訪問しあひ、
答礼を行
なう ことこそ 非常に 大切である
と 考えて おります。
どうして、梯儁様を 帯方郡へ お送りする だ
けで済ませられ ますか
倭国は、梯儁様の このたびの ご来朝に 対
して 厚く 御礼 申し 上げる 為、
梯儁様を 帯方郡
へ お送り する だけで なく、
魏国の 都へ 参上し、
魏帝に 朝貢して、
答礼を
行なわ なければ なりません
「そういう わけ ですから、
い ずれ そのうち
倭国 の 一 かる べき 者か、
梯儁様を 帯方郡へ お送
りし、
その後 洛陽の 都へ 赴いて 詔恩を 答謝する はずで ございます」
「どうぞ 梯儁様。今の ところは、
帰国 する
など と おつー やら ないで、
その 時 来る まで
この 倭国で お心おき なく お過 ぎし 下さ い ませ」

794-1/2

改行

留任 紀上135
or 799P

1693P

792P 800P
799P 1251P

1155P

の項において、
「この当時の倭人達は、珍客を迎えたとき
に、精一杯の歓待につとめ、数年の長きに
わたって留任める事と、早礼儀と心得ていた
のであううと述べた。
すなわち、こうしたことから、正始元年（二
四〇）に倭国へやってきた梯儼は、引き留め
られ、長年月にわたって逗留しつづけた。
三年も後の正始四年（二四三）に倭王の使下大夫

尚、第八章「垂仁天皇へ後漢からの使者
梯儼は、倭人達の熱心な異常なばかりの
説得に根負けして、折れざるを得なかった。
神仙の島に逗留することにしたし、この
葉に甘えて、もう暫くの間、この
に帰れませんな。それでは、お言
うですか。それほどこまで言わねば
必死になつてなため、引きとめた。
掌客（接客係）の彌馬升達は、梯儼の心を

1691P 1/2 15

1691P 2/2 15

鮫太夫

鮫太夫

改行

こと

伊勢者掖邪狗等に送られることに
なるのであううとこの物語では考えた。
〔魏志倭人伝〕正始元年条の末尾へ倭王
使に因よって上表し、詔恩を答謝す（参照）

魏志倭人伝
因よって
1305P

梯こいし傷けんのかたくなな心か和らぎ、倭国での滞
在ざい延長えんじやうに同意どういが得えられたとき、
掌客しやうかくらは、ほっと胸むねをなであろて安堵あんどし、

⊗

1334P

にこやかにここう言いった。

「海中かいちゆうのこの国は、美しいばかりでなく、
たとえばようもなく、実に良よい所ところでございます。
どうかお寛かんぎにななって存分じゆんぶんにお楽たのしみ下くださ

い

そんなことがああつて後、倭人達わじんたちは、以前いぜんにも増まし
て梯てい傷けんららを盛大せうだいに饗きやう応おうした、やうした饗きやう宴えんの最初の
日ひ、それは正始元年せいしげんげんへ二四〇、九月五日、
だだっためかも知しれない。

なお、推古紀すいこぎ十六年九月五日条に、

他のところでおいた

1699P129 漂つては 浮き人なりの ひととよこと云
 毎日夜毎 1860P
 さまよつてゐる
 1630(2018)4.19(木)~4.21(4回)

1.695P

1620P 1/2
 1688P 有智愛姫
 比下192
 165P

客等を難波の大郡に郷食たまふ
 とある。
 日、毎日毎日、宴の連続だった。
 梯儁は、華麗に舞うあの有智愛姫（比目魚）
 の姿に心を奪われ、見入る。少しおどけた
 口女（ボラの古名）の歌舞にヤンヤの喝采をお
 くり、そして傍らに侍る赤女（鯛）にも舞い
 を舞わせては、その優美な舞いにうっとり
 るのだった。豪華な御馳走が並ぶ下、香り高い美酒
 が注がれて、梯儁は、蓬萊の国の霊気
 にあてられたかのように、ただただ酔いしれ
 て過ぎた。
 は、さらには、倭人達の下にも置かないもてなし
 は、毎日毎夜毎続いていた。
 は、夢うつつ幻の世界を漂つて、陶然として
 地、よい快楽に身をまかせ、陶然として
 ひたりきり、遊びほうけるのだった。

気持よく酔つてゐる
 さま

うちやま (うちやま)
有智山 852-7/4 2行
うちやま とよいた

八上記 418P
玉姫 云舒 1784P
同天 ⑤1688P

1.696P

秘太巻 46P

559.5.28
月 20
1005
2079P

陰暦 73P

愛姫
はしひめ

やがて梯偶は、倭人達の助言に従い、宇

治橋姫へ有智愛姫、後の筑前国筑紫郡大宰府

町の大字である有智山あたりの姫を妻とし

て迎えることになった。(山城国風土記逸文)

△宇治橋姫(参照)

・梯偶が、玉のようなその姫(比目)に多大の

情愛を注いでいるものだから、倭人達が、二

人を夫婦にしようとして取りはからったのである

・なお、倭国の貴人達は、当時、皆四・五婦

を娶っていた。(魏志倭人伝参照)

・そこで倭人達は、賓客梯偶にも、

「赤女だけでなく、愛姫をも娶るように」

と勧めたのだった。

住江から少しへだたった新造の館に輿入し

てきた初初しい姫(比目)は、その家に入る

や、先ず火を跨ぎ、ここに乃ち夫と相見え

隋書倭国伝(参照)

こうして目出たくも、愛姫との盛大な婚

家に入るや、必らず火を跨ぐことになっているらしい(隋書倭国伝参照)
この風かつた所作は、赤女を娶った時も同様だった(新妻は夫の)

だった である 375

⑤

新妻は夫の

そのはし 文橋 1593P-1/5
すみのえ 住吉 1588P

1697P

たかみ 5841

かんたい 名
新待 499P
親切なでな
元1059P

梯傷は 危惧しつつで 住吉の 橋を渡った。

の館へと足を運んだ。
赤女は、さぞかし機嫌を悪くしているだろうな。
梯傷は、ある日、そと赤女のいる住吉。
葉を交わし、それは人もうらやまほどであった。
梯傷は、片時といえども比目を見離さず、身。
明るく陽気で、いかにかいいい。
く夫梯傷に尽くし、それを喜びとしている。
うで、あつた。

愛姫は、実に愛くるしい目鼻立ちの愛姫は、

＊

祝宴が幾日も幾日も、続いていった。
新造の館は、歓待に沸き返った。
新郎は、後人達に大いに祝福され、祝。
酒の洪水に溺れんばかりであった。
姫の儀式がとり行われ、さらにまた、

元527P

えび (こと)
素振り立
④ 1698^D-2/3 未6行

377

① 1755^P-2/ 素振 元 13/5^P
② 355-5/6
③ 1717^P-2/2 ④ 1866^P-2/3

1.698^P-2/3

1.698^P-2/3
柔順 元 1047^P
従順 元 1847^P

■ それでは、倭国の女性達は、いつごろから
そんなにも慎み深く、嫉妬さえしないよう
になったのだらうか。

■ 太伯の後と称する者達がこの日本列島へ渡
来する以前から、妻達は夫に柔順で、やきも
ちすら焼かすなかつたのであううか。
・ そうかも知れない。

■ 一かゝりながら、この物語では、
へ簀子達の百余年の内の一員として、その極南

界の地を居処として、之を許された時（紀元前
九十七年頃）以降、倭人達は、必然的に殷の王
族の末裔である簀子達の強い影響を受け

ることとなり、――倭国の女達は、簀
子の女達と同様、嫉妬の素振りさえ見せ
ないようになつてしまつたのであうう。

と考へてみたい。

■ 先述のようによ、日三国志乃魏書三十、

鳥丸鮮卑東夷伝へ夫余条に

「男女が密通したり、女性が嫉妬深かつた

元 2/23

汲む 元1652^P
(元643^P)

1.698^P-3/3

天つま
改行

元1964^P

りしたときには、共に死刑に処せられる。特
に嫉妬がきらわれ、死刑に処したあと、その
死体を都の南の山上に持つていつてさらし、
腐爛するにまかせられる。女の家の者がその
死体を引き取りたいと思うときには、牛や馬
を納めてはじめて死体がかえさる。
と述べられていゝ。(第二章八般の未喬たちの
風俗習慣)の項において既述)
恐らく、
へ夫余と同じく般の流水を汲む箕子達の社
会においても、特に曰嫉妬が嫌われたので
あろう。――そして箕子達の支配下にあ
った倭人達も、いつの間にかその風習を取り
入れてしまつてゐた
と推察される。
倭国の女達はそれ以後
へ他人に曰嫉妬深いと思われなくなつて
その気持ちをはた隠しにかくすようになった
のではなからうか
と思われる。

また、高貴な男が皆四・五婦を娶り、産めよ増やせよといふ時に、嫉妬深かったり、男を独占しようとする女は

つたて 屈託 634P
くくくすること
あきること

入れ代り 151P
天竺 1699P

1.695P
199P
1861P

日本の節 232P
1861P

住吉 1206P
陰暦秋9月未は今の10月未
秋は7.~9月
1316P
魏文 40P

嫌われ敬遠されたのかも知れない。

小林 465P

三十余国、および其の余の旁国

いつか、邪馬台国は、秋の色に彩られて

いた。住吉の小島の

木々の葉は、赤や黄色に染まり、

遠く近く、見わたす限りの森や林や山々も、艶や

かな錦繡を纏ったかのように、たとえようも

な美しく輝り映えていた。

そよぐ風は、涼味を帯びて膚に心地よく

見下ろせば、有明海の干潟に、ぱいにシギ達

が群れていた。日本の野鳥と、山と溪谷社、一九九二年発行、ハルマシギ

梯儼は、蓬萊の見目麗しい女達に囲まれ、

日々遊びたわむれ、何不自由なく、まこ

とに集まっていた。

「客人をもてなす為」と称して入れ代り立た

ち代りやってくる倭国の高官達との夜毎の宴

もまた、屈託なくて愉快であった。

本当に、幸せに思う毎日であった。

いつともなく、倭国の人々についての色々の

ことが、梯儼にも分かってきた。倭人

1700^P

達はなしの話おとうじょうをあ然あ合あすると、おおよいか以下いかのよういかに解かい

される。

*

1286^P

⑧ 861^{P-2/2} 姐奴 ⑧ 859^{P-2/2}
⑧ 860^{P-3/3} ⑧ 855^P

1.701^P ⑧ 852^{P-1/2} ⑧ 847^P

同文 ⑧ 846^{P-1/2}

⑧ 834^P
⑧ 845^{P-1/3}

因みに倭国内の三十ばかりの国々を列举し
てみよう。次のように並んでいるようだ。
（第十章成務天皇八十三ばかりの国々の項に
おいて既述）倭国内に置かれた
■狗邪韓国の次に對馬国が有り、次に一大国
（一支国）が有り、次に末盧国が有り、次に
伊都国が有り、次に奴国（北の奴国）が有り
次に不彌国が有り、次に南に水行二十日
投馬国（設馬国）に至り、南に水行十日陸行
一日で邪馬台国の都へ至る。
■一方、先述の倭国（北の奴国）の次に
鳥奴国が有り、次に支惟国が有り、次に巴利
国が有り、次に躬臣国が有り、次に邪馬国が
有り、次に鬼奴国が有り、次に爲吾国が有つ
て、陸路で邪馬台国に到ることも出来るという。
■邪馬台国の次に斯馬国が有り、次に己百支
国が有り、次に伊邪国が有り、次に郡支国（都
支国）が有り、次に彌奴国が有り、次に好古
都国（京都郡）が有り、次に不呼国（遠賀郡）
が有り、次に姐奴国（姐奴国、周防国）が
有り、次に對蘇国（對來国、後の高來郡）

⑧ 859^{P-1/2}

⑧ 860^{P-3/4}

⑧ 860^{P-3/3} 34

こと
 「よに」 2328
 行政区画 572P
 親支 58P 1702P
 1698-1/3
 後漢 57P
 861-1/2, 2/2
 華奴蘇妓国

有り、次に蘇奴国（彼杵郡）があり、次に
 呼色国（呼色国、杵島郡）があり、次に華奴
 蘇奴国（神埼郡）があり、次に鬼国（基肄郡）
 が有り、此水らの国々が女王國倭國の境界
 内（勢力範囲内）にある。

かつて、倭奴国は、箕子達が支配して
 た百余年中の極南東に位置していた。

とこのころか、桓・靈（一四七-一八八）の頃
 この地の今の倭国の地は大いに乱れ、更々
 相攻伐し、歴年主無しといった状態になった。

利いたのは、倭の奴国であった。

倭人達は、この地の支配者となった。

百余国の行政区画は改められ、三十ばかり
 の国々が置かれた。そしてこれら倭人達の
 領有権の及び地域は、倭国と総称される
 ことになった。

またその後、南の奴国は女王卑彌呼の都する

⑧869^P-1/3

紀小170^P

1,703^P-1/2

魏志倭人伝 43^P

魏志倭人伝 40^P

魏志倭人伝 40^P

後漢書 倭口の極南界

ところとなり、曰 邪馬台国やめとのくにと呼ばれるよう
になった。

■「子まり」倭国の極南界に位置してゐる」女王国

曰 邪馬台国やめとのくにより以北の国々について、其

の戸数・道里など掌握してゐるのだが、

如何んせん、其の餘の旁国は遠絶にして詳か

に於るゝと出来ないうのだという。〔後漢書

倭伝「魏志倭人伝」参照〕

倭国の南の曰 狗奴国くぬくに（球磨・贈啖）は、男

子こを王と爲し、女王に従属してゐないで

だが、狗奴国の男王に仕える官に曰 狗古智

卑狗ひこという者がかりて、倭国と狗奴国との接

点あはれをなしてゐるのだと、ある倭人は言つた。

●曰 狗古智卑狗ひことは、いかに倭国的な名

前である。倭人達が、親しみを込めて呼んで

ゐる名なのかどうか、いは、倭人を

父として生れた子なのか、詳しうとは分ら

ないが、ともあれこの曰 狗古智卑狗ひこを通し

て、倭国は狗奴国の内情にかなり明るいよう

1479 小林 131P
出征 559.66世
我々ばかりで
いくこゝ

1,703^{P-2}/₂

魏志倭 49P
小林 37P
59P

866P ストル

に見受けられるものだった。(第十章へ其の餘
の旁國「狗奴國」の項参照)

一方、女王國の東、海を渡って千餘里には

復た國(現在の中國・近畿・四國地方)があつて、
倭人はその國のこゝとを曰、狗奴國と

呼んでゐる。(「魏志倭人伝」・「後漢書

倭伝」参照。既述)

倭國のこゝで、東方の曰、狗奴國は脅威的
な存在であつて、當時といへども油断は許さ

れず、倭人たちはこの國境の攻防のた

めに多大の兵力を割かねばならないといふや

かつた。一定の年令に達した男達は、徴兵さ

れ、この東方の戦線へ出征していくのだ。

そしてさらに倭國は、海北の「狗邪韓國」

の安寧の爲にも多くの兵を常駐させ、
なければならなかつた。

1779

見てとる 乙2104^P 原文 赤2-587^P
古代朝鮮57^P 「和馬台」横一雄11^P
見受ける 前頁15^P 倭/台をさす 52^P

1699^P 30年
タイトル

1,704^P (2)

この当時、韓・濊・倭が弁辰で鉄を採つてゐるが、これは諸国間の利害が絡むことである。倭国は軍隊を狗邪韓国や駐屯させ、力関係を以てでも有利なものにして、弁辰にたいと考へてゐる。ように見てとれた。

このようなわけで、一定年齢に達した男達の多くが徴兵され、弓・矢・矛・刀・楯などを手に手に勇ましく、東へ、ノノノあるいは北へと出陣していった。

見送られ、勇んで出かけていった男達はもう

めったなことでは帰ってこなかった。鎧迫り

合いはいつはるとも知れず、混沌とてう

ち続いた。父や夫や兄・弟、そして息子達を

送り出したあとの倭国内には、女ばかりが多

く残されてゐて、

「倭国中が、ほとんど女ばかりだ」

とさえ思ふほどだ。

梯儻が目にする倭人の国では、貴人ばかり

でなく、一般庶民を見わたしてみても、いた

を 狗邪韓国

隋書 73^p

魏書 95^p

1705^p - 1/2

魏書 96, 57^p

「そそ」... 1308^p ... 1698^p

るところでは女ばかりが目立つた。
一かゝる倭国の世帯は、非常に貞淑で、
なにお、梯儻のこの記述は、中国の男達にと
って興味深いことだったに違いない。
中国の文献に、
「國には女子多く、大人は皆四・五妻有り、
其餘も或は兩^リ或は三^サ女人淫せず、好^{ヨシ}（や
きもち）せず」
「其の俗、國の大人は皆四・五婦、下戸も
或は二・三婦。婦人淫せず、好^{ヨシ}せず」
「志倭人伝」
「國多婦女、不淫不妬」
「晋書」卷九七
四夷伝・倭人条
「其俗女多男少、貴者至四五妻、賤者猶兩
三妻、婦人無妬」
「梁書」卷五四・諸夷
伝・倭条
「女多く、男少し。婦人淫妬せず」
「隋書倭國伝」
なとにある。

2172

554

（二）

こたえ 806

1,705^P - 2/2

後妻 46^P 梁 95^P
後妻 57^P (こ)

娘を嫁人とはいへず
社会は、いかに ^{まことに} 95^P
他の種族の如き
めったの ^{改訂} 2174^P

なるほど、権力者である貴者が多くの妻を娶ることは中国でも全く同様であつて、ことに理解し易い。国では、下戸(庶人の意味)か、さえも二人、あるいは三人の妻を娶つてゐるのだつた。出兵の爲しといふことが頭では分かつてさへ、梯隊として、これは大きな驚きだつた。とであらう。まったく、邪馬台国は、女人国といつても過言でないほど、女の多い国であつた。

とは、いへ、被支配者(下戸)である男達がいゝた、と解釈するのは妥当でない。

日々戦いにあけくわてゐる戦場からは、戦闘員の増強、武器の補充、食料や衣類の追加など、矢の催促があつた。

毎年毎年、大勢の兵士達を戦線へ送り出す為には、多くの妻に多くの子供を産ませ、育て上げねばならない。

そして、はてしなく長びく戦場へ食料やその他の物資を送り込む為、更に過酷とも思ふ絶え間なく

「祖賦」
次頁

「死牢子」は「X」。
「應民に能く業牢」
加ふ。

改行

4,706^P

えるほどの労働が課せられていて、倭国中の
 男もせも、日夜汗を流して働き、その収穫物等
 の多くを租賦として納めねばならなかった。
 ーしかし、倭国の人々は、**実に勤勉**であつた。
 不平一つ言わずに働いた。まさしく倭国
 全体が、**熱気**を帯びてゐるようであつた。
 一方、日御子の男弟、月読尊が治める東国
 には、**兵達**があふれてゐた。東の**日拘奴国**と
 対戦相手とする**激烈な戦い**が、幾十年來繰返
 されてゐるからであつた。
 ーそれは、**両国互に覇権を賭けての激突**で
 あり、**死闘**であつた。まさに**弱肉強食**、**食うか**
食われるかである。ー**も一も敗北**しようものな
 らば、倭国の民の全てが**悲嘆のドン底に墮**
ちであらう。殺されるか、**奴隷**となつて働くか
 その二つに一つしかないの**であらば**、決して負け
 るわけにはいかな**い**のだ**つた**。
 ー全倭国の人々の願ひは、ただ一つ、
 倭国が**勝つ**。すなわち、**東の国**、**日拘奴**
 国に**勝つ**事が**獲印**として高々と掲げられ、
 人々はこの目的の**為に、熱く燃え上り**、**きびい**

獲
て
た
い

下

前

親王様46P 左下
小林P ④1819P 同
714

1707P
1
HL

おみえ 319P
註付 1364P

一丸 121P

臣服 804P

親王様 86果左ニ

左序 341P 355P
2328 713

い労働をもちとわ労働きつづけた。
た。一かに、
厳然とした階級、
の事実だが、
領分をよくわきまえており、
なつて従い服する。ていて、
一丸となつて闘おうとする気魄が漲つて
いるようにうかがえた。
庶人はこの激しい戦闘の緊迫した情況下
にあり、支配者達を信じて己の運命
を託していた。
そして統治者達は、周代に理想とされた国家
をここに具現化し、庶民の総力を結集
て富国強兵を図るのだった。
なお、親王様人伝に、
7. 尊卑各々差序有り、相臣服するに足る。
租賦を収むし
とある。

*

差序 102P
相臣 740P
漢ニヨ